古津八幡山遺跡発掘調査現地説明会資料

①古津八幡山遺跡の概要

標高約 50ｍの丘陵上にある弥生時代後期（約 2000 年前）の大規模な高地性環濠集落で、古墳時代中期（約 1600 年前）には県内最大の古墳である古津八幡山古墳が築かれます。

弥生時代から古墳時代にかけての変遷や、北陸や東北との地域間関係など、当時の日本列島の社会情勢を考える上で核となる重要な遺跡であることから、平成 17 年に国の史跡に指定されました。

弥生時代の環濠に囲まれる範囲は南北 400ｍ、東西 150ｍほどです。これまでの発掘調査で竪穴住居が 60 棟以上、方形周溝墓３基、前方後方形周溝墓１基などが確認されています。環濠は幅・深さとも約２ｍで、Ｖ字形の形をしています。この時期、中国の歴史書の中で「倭国乱」の記述が見られることなどから戦いに備えたムラと考えられています。

古墳時代の古津八幡山古墳は直径 60ｍの円墳で、越後平野の広い範囲を治めた豪族の墓と推測されています。

②古津八幡山遺跡の整備経過

2004(平成 16)年より整備事業を始め、主要なエリアの整備が終わった 2015(平成 27)年から古津八幡山遺跡歴史の広場として全面供用を開始しています。

これまでに竪穴住居７棟や環濠、方形周溝墓２基、前方後方形周溝墓１基、古津八幡山古墳などの復元整備をし、麓にはガイダンス施設である弥生の丘展示館が建設されました。

③おもな発掘調査成果

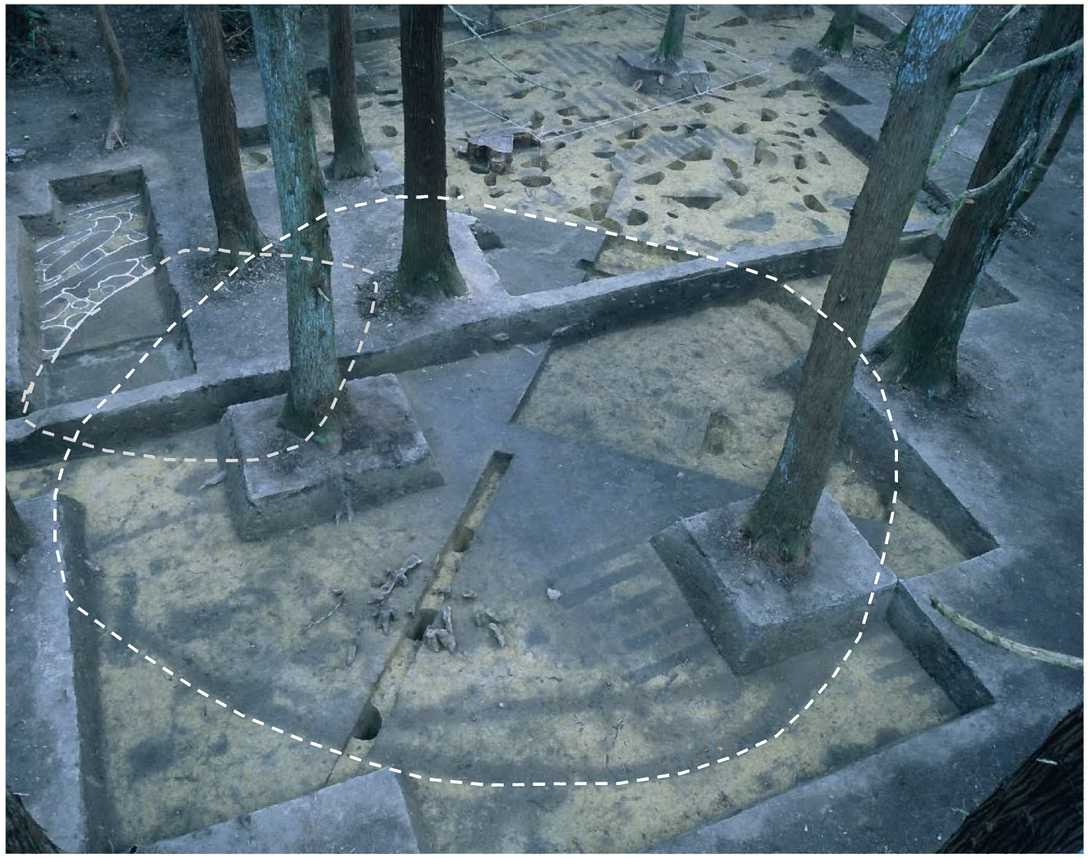
史跡をより適切に保存・管理していくため、史跡内外における遺跡の状況を把握することを目的として、2017 年から遺跡の北東域の史跡指定地外の場所において発掘調査を実施しています。

これまでの調査で、標高約 25ｍの遺跡北東域において弥生時代の終わり頃の時期の大形の竪穴住居（SI1）や、弥生時代の掘立柱建物(SB1)などが新たに見つかりました。大形の竪穴住居は約 9.5ｍの楕円状で、当遺跡で最大の竪穴住居です。また、掘立柱建物は当遺跡で初の発見となりました。なお、大形の竪穴住居の内側には別の壁溝が確認されており、建て替えが行われたと推測されます。

大形の竪穴住居と一部重複して確認された別の竪穴住居（SI465）は、一辺約４ｍの大きさで、炉や柱穴を確認できました。今年の発掘調査で、大形の竪穴住居よりも新しい竪穴住居であることが明らかになりました。弥生時代の古津八幡山遺跡における最終段階の建物と考えられます。

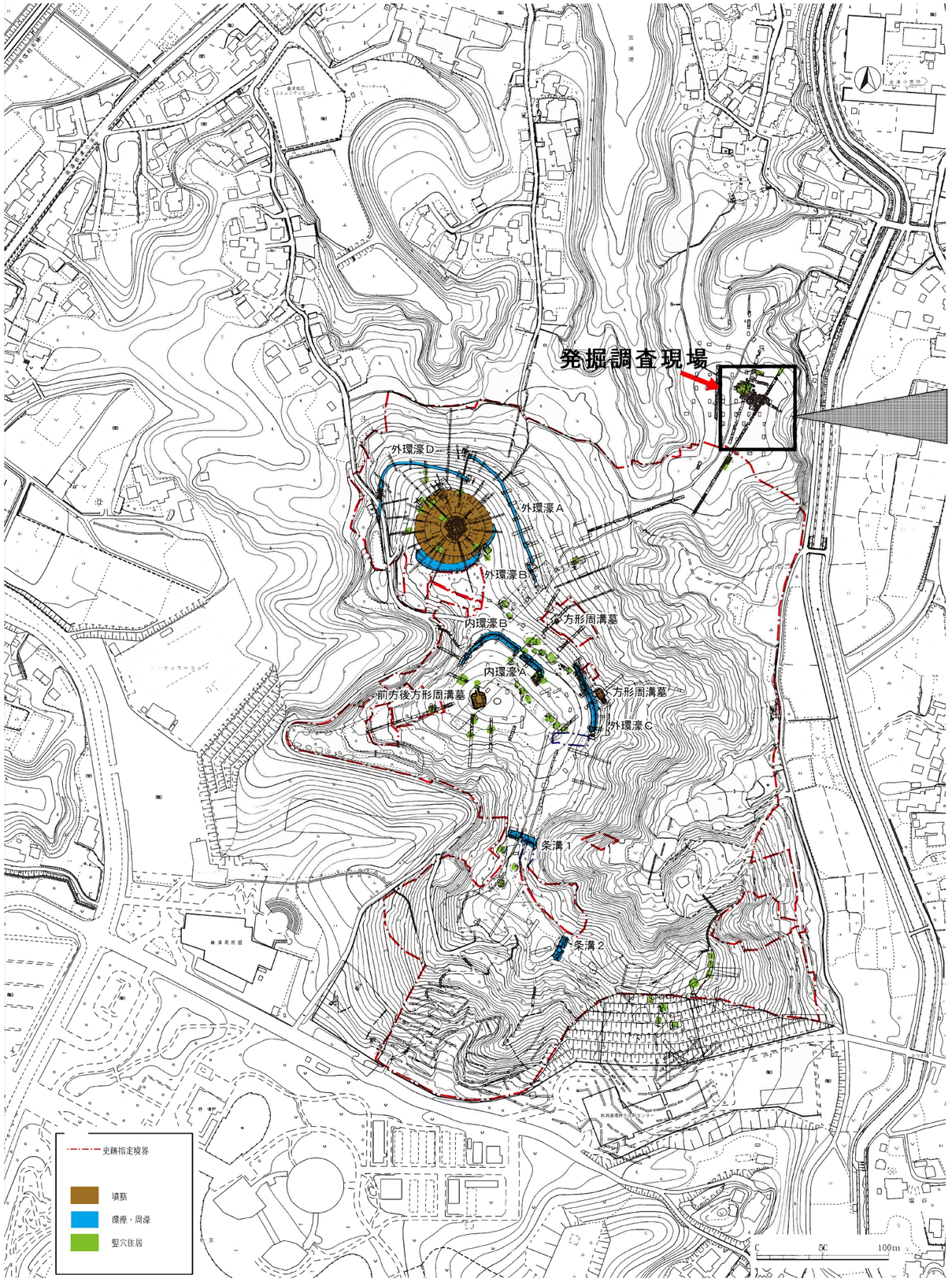
調査地は、丘陵頂部の集落の中心域より一段低い場所に位置しており、弥生時代においてこの場所がどのように利用されていたのか注目されます。

古津八幡山遺跡全景（北東から）



竪穴住居跡（SI1・SI465）全景（北西から・点線は竪穴住居推定ライン　平成 30 年度撮影）

掘立柱建物（SB1　南西から　平成 30 年度撮影）



古津八幡山遺跡全体図

2017 年～2019 年発掘調査平面図